

和の花を育て守る

守っていききたい、かつては身近だった植物の例



■フジバカマ (キク科)

源氏物語にも登場する秋の七草の一つですが、自生地はごく限られます。一般に流通するのは別種。葉は香料となり、海外との渡りをする蝶アサギマダラが蜜を好むことでも知られます。都市緑化協会、様々な団体が鉢植えなどで保全。

京都府絶滅寸前種



■フタバアオイ

(ウマノスズクサ科)

葵祭に欠かせないフタバアオイは、上賀茂・下鴨両社の境内周辺によく見られた植物でしたが、近年激減し、祭にも影響を与えています。「葵プロジェクト」と学校、企業などの「里親」によって保全繁殖が図られています。



■ヒオウギ (アヤメ科)

花は祇園祭に合わせるように咲き、厄除け・魔除けとして街で飾られます。扇が開いたような葉がつきます。一般には草丈が低い変種のダルマヒオウギが飾られます。タネは漆黒で「ぬばたま」と呼ばれます。

京都府絶滅寸前種



■キクタニギク (キク科)

京都の東山から流れ出る菊溪周辺に自生し、観賞用にも珍重されたと伝えられますが、現在東山では確認できません。明るい色の葉で、晩秋に小さな黄花を次々と咲かせます。キク科キク属のモデル生物としても注目されています。

京都府絶滅危惧種



■オケラ (キク科)

八坂神社「をけら詣り」ではその根を焚いて無病息災を祈ります。夏から秋にかけて白い花を咲かせます。かつては京都の山野で身近に見られ、薬用、食用、虫除けなどとして暮らしの必需品でした。

京都府絶滅寸前種



■キキョウ (キキョウ科)

秋の七草の一つで、薬用にされます。東アジアに広く分布し、半自然的な草地などに自生しますが、国内では希少になっています。江戸期に八重など様々な園芸品種が作出されました。

京都府絶滅寸前種

かつて暮らしの中で利用され、親しまれてきた植物は、住まいの近くにあり、すぐに出会えたものでした。しかし、生活様式の変化、生息地の遷移の進行、シカの食害、さらに、近年の気候変動などにより、身近だった植物が危機に瀕しています。

さまざまな団体・個人の知恵を集めることにより、かつて身近だった和の花のある暮らし、環境を少しずつ取り戻せないでしょうか。

そのようなことを願い、京都ゆかりの和の花保全のため、大学、企業、社寺、行政等とのネットワークづくりに取り組んでいます。

希少になっていく植物

京都府レッドデータブック (RDB)

2015 の改訂版レッドリスト (RL)

2022 が 2023 年 2 月に公表されました。植物の掲載種数は、改訂ごとに増えています。(下表)

京都府 RDB (RL) に掲載された種子植物の種数

カテゴリー	2002年	2015年	2022年
絶滅種(※1)	62	45	46
絶滅寸前種	157	217	252
絶滅危惧種	142	222	236
準絶滅危惧種	142	180	176
要注目種(※2)	54	75	78
ノミネート種数	557	739	788
ノミネート割合(※3)	約23.7	約31.4	約33.5 (%)

※1……絶滅種数の 2015 年の減少は調査による発見があったため。

※2……外来種を除く要注目種の数

※3……ノミネート種数が府内の種子植物約 2,350 種に対する割合

さまざまな団体と連携し、京都の希少な植物の保全・普及に努めています



京都ゆかりの希少な植物の展示 (藤袴と和の花展)



KES エコロジカルネットワークプロジェクト



京都市京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認証制度に基づく企業・団体へのアドバイス



情報収集や普及啓発のための冊子類の発行

公益財団法人京都市都市緑化協会

〒605-0071 京都市東山区円山町463番地

(2024.10)

TEL 075-561-1350

FAX 075-561-1675